つながる湾の軌跡
プログラム編 2013–2020 アーカイブプロジェクト

Japan／Miyagi

Matsushima Wan

TSUNAGARU WAN PROJECT

地域と出会い直し、誰かに伝える。

東日本大震災後、地域外からやってきたアーティストを
受け入れることから始まったつながる湾プロジェクト。
しかし、作品や「人」との出会いにより、
地域を見る新しい「視点」を得た地元メンバーは、
次第に独自のプログラムを企画するようになりました。
自分の地域ともう一度出会い直すには。
その体験の豊かさを共有していくには。
つながる湾プロジェクトの試みの記録です。

「つながる湾プロジェクト」

東日本大震災で被災した宮城県塩竈市で、地域文化を活かして未来を描くことを目的に、2013年にスタートしたプロジェクト。
【松島湾とその沿岸地域の文化を再発見し、味わい、共有し、表現することで、
地域や人・時間のつながりを「陸の文化」とは違った視点でとらえなおす】ことを目指し、
さまざまな文化・アートプログラムを企画・実施してきました。
このポスターでは、震災から10年を迎える2021年に向けて「つながる湾」が辿ってきた軌跡を振り返ります。

2013 自分の地域と出会い直す

① 「種は船」プロジェクト

朝顔の種の形をした船「TANeFUNe」が、
松島湾を行く！

2013年5月に塩竈にやってきた5人乗りの小型船「TANeFUNe（たねふね）」。アーティスト・日比野克彦さん監修・デザインのもと造船され、「海からの視点」を伝えるために航海をする船でした。この船と一緒にやってきたのが、アーティストの五十嵐靖晃さんと喜多直人さん。このお2人がTANeFUNeで浦戸諸島を巡航しながら、人と人、人と地域のつながりを作っていきました。

種は船プロジェクトWEBサイト
http://tanefune.com/

担当 高田

② そらあみ

空に向かって漁網を編む、
アーティスト五十嵐靖晃によるプロジェクト

五十嵐靖晃さんは、土地に入り、その土地のことを調べ、土地の人と対話をし、作品のテーマを決めていきます。初年度の「そらあみ」では、湾の上に暮らす浦戸諸島の人びとの視点で風景を捉えようと、参加者と編み上げた漁網を牡蠣の養殖だなに掲げました。2年めは松島、3年めは多賀城で、それぞれに時間と空間を超えた「視点」で網越しの風景を描き出しました。

そらあみWEBサイト
http://igayasu.com/project/sora_ami/

担当 大沼 高田

③ チームwan勉強会

住んでいるのに知らなかった、
自分たちの土地を学ぶ

「TANeFUNe」そして「そらあみ」が動き出そうとしていた頃、「まずは自分たちが自分たちの土地のことを知ろう」と津川登昭のコーディネートで始まった勉強会。毎回10～20人程度の地元メンバーが集まり、講師の話を熱心に聞きました。「若宮丸の漂流記」「ハゼの数珠釣り」「白菜の育種」など、その後プログラムのテーマとなるネタの多くとこの時に出会っています。

企画 津川

④ 語り継ぎのためのリーディング

一人ひとりが、自分の方法で
地域の物語を伝えるきっかけをつくる

島のリサーチや勉強会から刺激を受けた高田が、様々な切り口から地域の物語を一人ひとりの感性でとらえようと考案したプログラム。江戸時代に漂流し、はからずも世界一周した浦戸諸島の船乗りの物語を、歌や詩をつくる、調理や制作体験をするなど、実際に手と感性を動かす作業を通して自分のものにし、それぞれのやり方で後世に伝えていく試み。現在も形を変えながら継続しています。

企画 高田

2014–2015 学んだことを表現し、共有する

⑤ 湾の記憶をたどる体験型プログラム【ツアー】

浦戸諸島に散らばる記憶を手がかりに松島湾を体感する

勉強会を重ねることで見えてきた「湾の記憶」。それを体感するための島めぐりツアーを、勉強会に集まった仲間たちが力を合わせて実施しました。200年前に漂流した船乗りの物語を聴き、船乗りが見た風景を眺め、島のものを食べ、漁師の船で島を渡り、思い出を手紙に書いて海に沈める。実施のハードルの高さから1回で終了していますが、体感から多くの気付きを得られる、様々な可能性を感じられるプログラムでした。

企画 大沼 津川 高田 K.S 谷津

⑥ 海辺の記憶をたどる旅展／海辺の記憶をたどる旅展 多ゝ賀城（よろこびおおきしろ）

湾の財産を一堂に集めた参加型の企画展

湾の記憶ツーリズムを擬似体験できるすごろくを会場の中央に設置し、各プロジェクトで使った道具や「同居湾」の写真を展示したり、ワークショップやトークイベントも行った体験型展示。現地に行かなくても「湾」を体感し共有できる、2～3年目の集大成となるプログラムでした。つながる湾に関わりのある人、松島湾で活動する人が自然と集まる場になりました。

企画 大沼 津川 高田 K.S 谷津

⑦ 海底タイムカプセル

海底に沈む記憶をたよりに
湾の風景を想像する

参加者が書いた手紙（＝記憶）をタイムカプセルに封入して松島湾に沈めるプロジェクト。タイムカプセルは松島湾の底で数年間の眠りについた後に引き揚げ・開封され、手紙は参加者の元に送り届けられます。「日々の暮らしの中に、松島湾に思いを馳せる時間を作りたい」というコンセプトで考案したプログラム。

企画 K.S

⑧ 同居湾<写真展>

初年度にTANeFUNeの船長を務めた写真家・喜多直人さんが、浦戸諸島を巡回しながら撮り続けた写真を浦戸の風景の中に展示しました。東日本大震災以降、刻々と移ろいゆく風景に思いを馳せる機会にもなりました。

担当 高田

⑨ 浦戸食堂 まりこさんのカレーとその記憶

かつて浦戸諸島・寒風沢島にあった喫茶店「ゆとりろ」。そこには、長年、島の人びとに愛されたカレーがありました。店主まりこさんと、一日だけ復活したカレーを島で味わい、記憶を伝える冊子をつくる、アーティスト増田拓史によるプログラム。

担当 高田

2016～現在 より多くの人とともに、未来に伝える

⑩ 松島湾とハゼ

松島湾の食文化を
季節の営みとともに体験するプログラム

「日常の中に自然に松島湾の文化を取り入れる」というコンセプトで大沼剛宏が考案したプログラム。「松島湾でハゼを釣る」→「ハゼの焼き干しを作る」→「ハゼ出汁のお雑煮を作る」という3つをセットにしたプログラムで、2017年度から毎年続けて開催しています。もうほとんどいなくなってしまった「ハゼ釣り名人」の技とお話を後世に伝える取り組みでもあります。

企画 大沼

⑪ 湾をめぐるパスポート&文化交流市場

季節ごとに湾の営みを楽しむ「体験するパスポート」と、
湾の恵みを分かち合う「文化祭」

松島湾に暮らす人や訪れた人が湾の文化に触れるきっかけを年間を通して用意するため、「パスポート」を発行。さまざまな体験を他の活動団体とも連携して用意しています。「文化交流市場」はこれらが一同に介する文化祭。湾の文化に出会い、楽しみ、交流する場を毎年設け、人のつながりや新たな取り組みを作っていくための場です。

企画 大沼 津川 高田 加藤

フォーラム・トークイベント

Ⓐ つながる湾フォーラム ～海・種・記憶～（2013）

初年度の最後に開催した、つながる湾プロジェクトの取り組みを地域のみなさんに紹介するイベント。初日は活動紹介とトークイベントを行い、2日目は浦戸諸島を歩いて「語り継ぎのリーディング」を体験してもらいました。

企画 津川 高田 谷津

Ⓑ 土地の記憶を紡ぐ術（アート）～東北の海と森の実践から～（2018）

アーツカウンシル東京の主催で、5年目となる2017年に開催。つながる湾プロジェクトと同様に、自分が暮らす地域と向き合う術（すべ）として、アートでの表現活動に取り組む福島県会津地方のお2人と、大沼・津川が語り合いました。

企画 佐藤（アーツカウンシル東京）

書籍・フリーペーパー

Ⓒ 海辺の記憶をたどる旅／海辺の記憶をたどる旅 改新（2014–2015）

2～3年目の最後に、つながる湾プロジェクトのストーリーとコンセプト、活動内容を伝えるブックレットとして発行。高田と谷津が共同編集し、K.Sがデザインを担当。

企画 高田 K.S 谷津

Ⓓ ノック！ じぶんの地域ともう一度出会う10の扉（2017）

つながる湾プロジェクトが転換期を迎えていた2016年度末に発行。最初はアーツカウンシル東京側のスタッフとして関わり、後に事務局メンバーとなった谷津が、つながる湾プロジェクトの価値を内外に伝えるものとして企画編集。

企画 谷津

Ⓔ「松島湾の図鑑」シリーズ（2017–）

松島湾の文化をいつでもポケットに入れて持ち歩ける、ミニサイズの図鑑。イラストをふんだんに使い、日常の中で湾の文化に親しむための情報を詰め込んでいます。企画とデザインはK.S、取材と文章は加藤貴伸が担当。

企画 K.S 加藤

Ⓕ うみねこ通信（2017–）

つながる湾プロジェクトの活動を定期的に発信するフリーペーパー。加藤貴伸が取材・編集し、年に2～3回発行しています。

企画 加藤

つながる湾プロジェクトの仲間たち
（プロフィールは裏面にあります）

招聘アーティストとの協働プログラム　地域で生まれたプログラム　情報発信のプログラム

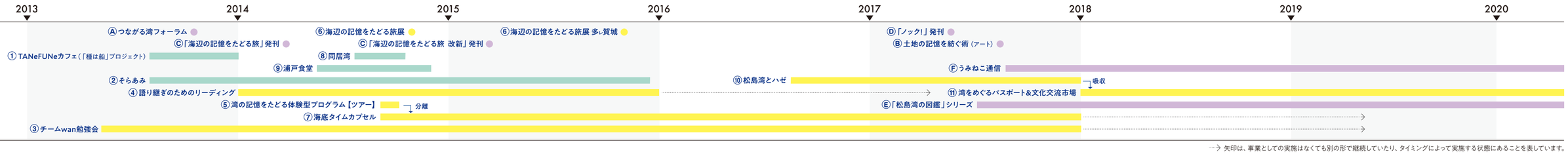
大沼 剛宏　津川 登昭　高田 彩　K.S　谷津 智里　加藤 貴伸　and more...

図鑑シリーズとうみねこ通信の取材・執筆を担当しているのは、2016年度から参加した加藤貴伸。高等学校教諭、編集プロダクション勤務を経て、出身地塩竈市へ戻り、ライターとして活動しています。

つながる湾プロジェクトのWEBサイトから
各プロジェクトの詳細をご覧いただけます。

http://tsunagaruwan.com/

裏面の「視点編」へGO！



→ 矢印は、事業としての実施はなくても別の形で継続していたり、タイミングによって実施する状態にあることを表しています。

発行／公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京　**企画制作**／アーツカウンシル東京+つながる湾プロジェクト　**編集**／谷津智里　**編集補助**／加藤貴伸　**デザイン**／SkyStars.　**印刷**／今野印刷株式会社　2020年3月　Printed in Japan.

Copyright©2020 TSUNAGARU WAN PROJECT. All rights reserved. 本誌掲載の記事、写真、イラストレーションの無断転用を禁じます。

つながる湾プロジェクト（主催：つながる湾プロジェクト運営委員会、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京）はArt Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）の一環として実施しています。

Tokyo Tokyo FESTIVAL 文化でつながる。未来とつながる。　ARTS COUNCIL TOKYO

つながる湾の軌跡
メンバーの視点編 2013－2020 アーカイブプロジェクト

TSUNAGARU WAN PROJECT

「つながる湾プロジェクト」

東日本大震災で被災した宮城県塩竈市で、地域文化を活かして未来を描くことを目的に、2013年にスタートしたプロジェクト。
【松島湾とその沿岸地域の文化を再発見し、味わい、共有し、表現することで、地域や人・時間のつながりを「陸の文化」とは違った視点でとらえなおす】ことを目指し、
さまざまな文化・アートプログラムを企画・実施してきました。
このポスターでは、震災から10年を迎える2021年に向けて「つながる湾」が辿ってきた軌跡を振り返ります。

自分と、地域と、仲間と。

つながる湾プロジェクトは東日本大震災後、もともと地元で活動していたメンバーと、東京都の被災地支援事業チームとの出会いにより生まれ、対話と実践を繰り返しながら進んできました。被災経験とそれぞれの地域への想い、また個々の活動が、「つながる湾」という旗のもとにどのようにぶつかり合い、共鳴し、どう変化していったのか。一人ひとりの言葉から感じてください。

〈用語解説〉
ASTT：Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）
「コミュニティの再興に、アートで寄り添う。」を掲げ、2011年7月に開始。現地の市民団体やNPOと協働し、地域での芸術文化活動でコミュニティ再興に寄与することを目指す。2020年3月現在、継続中。

身近な暮らしの中にある「地域の魅力」に気づける感覚を育むことが大事。土地の豊かさに触れて、先輩たちに学ぶ、仲間がいれば簡単なことだった。

松島湾 エリア在住

大沼 剛宏
Takahiro Onuma

代表・現場ディレクター

塩竈市出身。大学院卒業後、自営のデザイナーに。地元の地域づくりプレイヤーたちと年齢を問わず親交を持つ。

完成形を作ることより、今いる人たちでいい方向に向かって動く、その「変化」に価値がある。それを共有することが、一緒に生きてるということ。

松島湾 エリア在住

津川 登昭
Noriaki Tsugawa

地域プロデューサー

塩竈市出身多賀城市在住。仙台の広告制作会社に勤務しながら一般社団法人を起業。2016年に独立。

活動を通じて、地域文化の面白さを感じ続けてきた。そこで得た視点は、自分や、仲間たちの他の活動にも活かされている。

松島湾 エリア在住

高田 彩
Aya Takada

アートコーディネーター

塩竈市出身。地元でギャラリースペースや市設美術館の管理運営を行う。

「地域のため」とか関係なく、一人一人が自分の興味関心だけで動いていいんだと思う。自分が好きなことをとことんやり続ける、みたいに。

松島湾 エリア在住

K.S

デザイナー

大学院卒業後、多賀城市に帰郷。現在は組織に所属して、主にプロダクトデザインやグラフィックデザインを手がけている。

「その地域がその地域らしく生きる」ためには何が必要か。ASTTに共感し、松島湾に魅了されて、その方法をつながる湾で探してきた。

宮城県内 在住

谷津 智里
Chisato Yatsu

事務局、広報、被災地支援事業コーディネート

結婚を機に東京から移住。アーツカウンシル東京の被災地支援事業コーディネーターを経て事務局メンバーに。

「予期しないことが起こることが大事」という前提がある。「こうなってほしいな」というイメージはあるけど、「これをやってほしい」というのは無い。

東京 在住　東京 在住

佐藤 李青
Risei Sato
嘉原 妙
Tae Yoshihara

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー

被災地支援事業担当者。つながる湾プロジェクト発足時から、企画立案、運営、広報等についてともに考え、伴走。

震災以前 －2011/3

この地域が面白いと思っていたのは大学の頃から。
なんで上手くいかないのか、プロデュースというか、PR力が足りないんじゃないか、ということを、大学時代に話していた気がする。

2007年～
高田、K.Sらと県内で美術ワークショップ事業を展開

2010年
塩竈市の観光交流施設の開業準備に従事

2000年頃～
東北各地の歴史文化や観光をテーマにした企画展示を手がけ始める

2008年～
「純米酒BAR」、「センダイ自由大学」など、仙台圏を中心にしたテーマコミュニティを立ち上げ始める

いろんなプロジェクトの運営をしたことや、この時にできた
人のつながりが後になってとても役に立った。

地域で様々な文化活動の可能性を示したいと思い、そういう活動に関心のある若者や作家と一緒に活動していた。

2006年
ギャラリー「ビルドスペース」を塩竈にOPEN

2007年～
K.S、大沼らと県内で美術ワークショップ事業を展開

このときは、
地域で活動してはいたけれど、地域を題材にはしていなかった。

山形の大学に行って、山と海の文化の違いを意識するようになった。宮城に戻り、自分が気づいていないだけで、
それぞれの地域に、それぞれ面白いことがあるんだと気づき始めた。

2007年～
高田、大沼らと県内で美術ワークショップ事業を展開

2008年
東京の勤務先を退職、夫の実家のある宮城県白石市に移住

都心で生まれ、育ったアパートは否応なく高層ビルになってしまった。だから、地域の文化や自然環境に影響されて人の営みがあり、町になる、みたいなことに憧れがあって、
まちづくりをやりたかった。
でも移住したばかりで知り合いもいないし、土地勘もない。身動きが取れずに落ち込んでいた。

2009年頃～
東京都小金井市のアートプロジェクトに取り組む（佐藤）

2010年～
大分県のBEPPU PROJECTに関わり始める（嘉原）

「市民」とアートの関わりに悩んでいた。（佐藤）

その土地で生まれた新たな表現や眼差しが、どうすればその場所、そこで生きる人のものになっていくのかをいつも考えていたと思う。（嘉原）

2011年
佐藤、東京文化発信プロジェクト室（現・アーツカウンシル東京）に着任
（嘉原は、2015年に着任、2016年にASTT担当となる）

発災　**東日本大震災**

2011/3－2013/3 つながる湾プロジェクト前史

2011/7　ASTTの事業が東京で立ち上がる

2012/1　高田のグループが行う仮設住宅での活動をASTTが支援

2012/8～　**ASTT主導で浦戸諸島リサーチプロジェクト**（後につながる湾プロジェクトが始まるきっかけ）**がスタート**

塩竈の中でも、俺は震災で直接的な被害は受けなかったほう。何が震災で変わったかと言われると、周りの人たちが大きく変わったのを見てた。
自分の体一つで出来ることは被災した商店街の片付けくらいだなと思った。

震災復興イベントの手伝いとかチラシの制作で、地元の人達とつながりは続いていた。

「種は船」プロジェクト

プロジェクト立ち上げの頃はあまりいなかった。
東京都の事業のこともよくわかっていなかった。「浦戸でなにかやるなら手伝います」という感じで参加していた。

友達になった漁師の船で松島湾に出たとき、
僕らの財産は「湾というゆるぎないつながり」の上にあると気づいた。

ケーブルテレビでまち歩き番組を始める。
松島湾エリアを舞台にした「塩巡りツアー」を始める。
任意団体「チガノウラカゼコミュニティ」を発足

湾域のシンボルとして
「湾の駅」構想を唱える。
「地域の誇り」を醸成するため物産販売や観光案内をしながらエリアコミュニティを育てるという案。

高田さんに呼ばれて打ち合わせに行ってみた。アート関係者ばかりでアウェーだったけど、「地域を軸にした発想」を求められている気がしたので、
「湾の駅」構想をプレゼンしてみたら「これだ」ってことになった。
けど、この時は何が始まるのか全然予想できなかった。

出張美術ワークショップの仲間と一緒に、避難所で子どもたち向けの活動を始める
塩竈市内の仮設住宅でコミュニティづくりの支援活動

震災から1～2年は福祉的支援をしていた。アーティスト中島佑太さんと一緒に、仮設住宅の集会所で集いの場を設けたり、1日だけのラジオ局を開局して住民のみなさんと心の声を聞き合ったり。とにかく必死で、
アートだろうがなんだろうができることをやる、という意識だった。

被災地域の暮らしや文化に働きかけるような取り組みができないかとASTTから問いかけがあったが、暴力的とも感じられる"アートプロジェクト"による被災地域への介入に戸惑っていた。自分の生活圏以外の広範囲で物事を考えることが難しかったけれど、
なんとか次につないでいかなきゃいけないと思っていた。
そのためには、
地域の言語を持っている人が必要と感じ、津川さんに声をかけた。

高田とともに、避難所で子どもたち向けの活動をしたり、塩竈市内の仮設住宅でコミュニティづくりの支援活動を行う

まずは自分や友人が
いつも通り生活できるようになろう
と思った。それで、僕らの日常の一つだった"出張ワークショップ"につながる事からはじめた。

文房具を配ったり、アニメを上映したり。仮設住宅での活動資金を東京都に援助してもらっていることは知っていたけど、高田さんが窓口になっていて、僕はあまり意識していなかった。

「つながる湾」に続く動きの中に僕も入っていたと思う。
でも僕としては、「新しいことが始まった」というよりは、
震災前からいろんな人たちと一緒になって動いてきた活動が形を変えながら続いているという感じ。

震災後の夏に始めたボランティア活動が縁で、ASTTと、ASTTが支援する被災地とのなかだちをする仕事に就いた
とにかく現場を見て、現地の人の話を聞かないと、と思っていた。
震災直後だったから使命感もあったし、地域をテーマにしたプロジェクトに関われるのが嬉しくて、県内で実施されていた10プロジェクトの現場にとにかく一生懸命通っていた。

ASTT側の思惑と、現場の人たちの感覚が噛み合わずいたたまれなかった。
でも津川さんの「湾の駅」のプレゼンがあって、その場が一気に「このコンセプトなら一緒にやれるんじゃないか」という雰囲気になった。

ASTTの事業が立ち上がり、岩手、宮城、福島の3県で事業内容を検討する協議会を発足させた
そのエリアで
持続的に文化事業が展開している、その体制が生まれてくるのが復興にも大事
という前提で始まった。

今までやったことがないことをやらないと新しいことって作れない。
いろんな無理矢理な状況があって、みんなやらざるを得ないからやった気がするけど、今となってみればそれがあったからいろいろな人が集まっている状態が生まれた気もする。

2013 自分の地域と出会い直す

招聘アーティストによるプログラムを地元メンバーが受け入れ、協働で実施

2013/6　**「チームwan勉強会」開始**
（以後、12月まで月1～2回のペースで開催。2014年度以降にも続く）

2013/8～9　「TANeFUNeカフェ」（「種は船」プロジェクト）
「そらあみ　－浦戸諸島－」実施
（招聘アーティスト五十嵐靖晃によるプログラム）

そらあみ

勉強会で聞いた「海から見た日本列島」の話が自分の経験と重なって、
海辺の文化と陸の文化の違いが腑に落ちた。

（「そらあみ」のアーティスト）五十嵐さんはすごいなと。土地に入ってたくさんの人を魅了しながら作品を作って展示まで、こんなにスマートにやってしまうんだなって。
アーティストの力、地域とアートの関わり方を、作品制作を通して示してもらった気がした。

勉強会は、それまでの活動でつながった人を呼んで語ってもらったら仲間に大好評。
身近な歴史や文化の中にこそ楽しい種がたくさんあることに気づいた。
このプロジェクトでの
僕の役目が見つかった気がした。

「そらあみ」で展示された網越しに見たら、
見慣れた景色が変わって見えることに衝撃！
地域の魅力は、実はずっとここに在ったんだ
と気付かされた。

勉強会で、地域の先輩方のお話に
好奇心を掻き立てられた。自分たちがワクワクしたからこそ、面白さを伝えたくなった。

「そらあみ」が「島に通う」ことや海辺の営みである「網を編む」機会をくれた。
身体的に自分の地域を捉え直すことができて嬉しかった。
関連企画で行った三宅島は自分たちの被災状況や浦戸諸島を客観的に捉え直すきっかけをくれた。

勉強会に時々参加した。
好きなことを学んでいる人たちの話は面白かった。

「そらあみ」関連企画で三宅島に行ったとき、穏やかな松島湾との違いに初めて海が怖いと思った。
同じ「海辺」でも共生の仕方はぞれぞれだと知った。新しい感覚が生まれた気がした。
つながる湾がなければ三宅島に行くきっかけはなかったかもしれない。

松島湾地域の豊かさに驚いた。
地域資源もすごいし、
地域のことを好きで勉強会に集まって来る人たちもいて。

チームwan勉強会

「そらあみ」が始まると、
それまでずっと、戸惑い、苦しそうにしていた
高田さんが急に楽しそうになった。
積極的にプロジェクトを動かしたり参加を呼びかけたりしていて、ほっとひと安心した。

高田さんと津川さんの協力体制でスタートしたっていうのはけっこう大きかった気がする。
まちづくり側の人とアート側の人が対等に同じテーブルを囲んで議論する状態って他のエリアでは簡単なようで難しい。
デザインを頼んでアウトプットを作ることならあるけど。

無理矢理始まった感じはあったけど、
人と人が知り合う状況ができて、
何をやるかというより、個人と個人の関係ができることで動いていったんじゃないか。

2014－2015 学んだことを表現し、共有する

地元メンバーが多数のプログラムを企画し、実施していく

2014/1　高田企画により「語り継ぎのためのリーディング」開始

2014/3　プロジェクトブック「海辺の記憶をたどる旅」発刊

2014/8　「そらあみ　－松島－」
「湾の記憶をたどる体験型プログラム【ツアー】」実施

2014/12　**展覧会「海辺の記憶をたどる旅展」実施**

2015/3　プロジェクトブック「海辺の記憶をたどる旅　改新」発刊

2015/4　**つながる湾プロジェクト運営委員会発足**
（高田、津川の運営団体が受け皿
→運営委員による協議体制に）

2015/8　「そらあみ　－多賀城－」実施

2015/12　展覧会「海辺の記憶をたどる旅展　多レ賀城」実施

松島湾を一つの文化圏と考える新しい視点で、
いろんな人がそれぞれの考えで「動いてみる」期間があった。
主に関わっている仲間が10人くらいいて、自分も企画によって深く関わったり、関わっていなかったりだった。

ツアーの企画では、
湾の文化をいかに感じてもらうか、アイディアを出し合った。
それまでの活動で得てきたものを丁寧に積み上げて巡るアーカイブのような、貴重な体験だった。

2015年
「つながる湾プロジェクト運営委員会」代表となる
それまでは集まってきた人たちとみんなで動かしている感じだったが、運営委員会が発足して話し合うメンバーが固定化されて、流動的な人の集まりではなくなったのは残念に感じた。

「そらあみ」は3回とも、文化財指定された地域の象徴的な場所での展示だった。
地域の人とのつながりと協力があって実現していった。アートだからできる突破力があったと思う。

「語り継ぎのためのリーディング」を考案。
私たちが物語から感じたことや価値観も添えて、伝えていこうと。
様々な切り口で、今の私たちの考え方、感じ方を残していきたいと考え始めた。

湾の記憶をたどる体験型プログラム【ツアー】

ツアー企画は何度かやったことがあったけど、アートの視点を持ったツアーで、
それまで見えなかった時間軸を見出すことができた。

アートの視点を持った人と関わるのがワクワクで楽しかった。
アイディアを形にできてしまうメンバーの力はすごいと思った。僕はアートへ遠慮みたいなのがあって、みんなの表現を見ていたかった。

文化財と関わることは不可能だと思い込んでいたけれど、「そらあみ」はそれを実現した。
アートプロジェクトって行政も巻き込むことが出来るんだなって。

ツアーは、それまでの活動を通じて学んだことを発信することが面白くて、達成感があった。
仲間たちそれぞれの得意分野が活かされた。

仕事の状況が変わり、企画運営への参加が難しくなった頃、運営委員会形式に体制が変わった。人員不足に加えて、決められた枠の中で事業をこなしていく「運営のための運営」になっていったように感じる。

語り継ぎのためのリーディング

「つながる湾」は面白かったし、
自分のデザインの幅も広がった気がする。

海底タイムカプセル

ツアーのコンテンツとしてタイムカプセルを企画し、その後、単独のプログラムにした。
海に沈めたタイムカプセルにいろんな生き物が付くのが面白かった。
それが「図鑑」を作るきっかけになった。

プロジェクトを残すことが目的になっているように感じられた。
概念が地域に根付いて、プロジェクト自体はなくなるのが理想とメンバーに伝えた。

急に個別の企画が立ち上がり始め、把握して事業に位置づけるのが大変だった。一つ一つはとてもいいけれど、
コンセプトを内にも外にも共有する必要があると思った。
そのために「海辺の記憶をたどる旅」を作った。

私はこの時はまだASTT側の立場だったから、あくまでサポートだったけれど、一緒に作ったりもして楽しかった。だから、もっと中に入って体験したい気持ちがあったし、助けたいとも思っていた。

2015年
ASTTのコーディネーターからつながる湾プロジェクト事務局になる
高田さんが忙しくなったから、自分が事務局になって事務処理や運営をやれば活動を続けられるんじゃないかと。
でも一年やってみて、私が頑張ってどうにかするのではなく、
地元に主体的な体制ができないと続かないと思った。

2年目以降は方向性が決まって、
立ち上がってきたプログラムの位置づけをどうするか、どう整理するかという話が多かった。

海辺の記憶をたどる旅展

「旅展」を見て、
ものを作ったりする技術ってこういう風に使うものだなと思った。
学んだことを伝えるためにやっているというよりも、「伝えるためにはこういうやり方があるんだよ」ということを見せられてる。

何をやるのかと並行して、それを
「動かしていく体制をどう考えていくのか」の議論が始まった時期。
これまで自分たちが勉強して体験してきたけど、もっと地域に還元していく仕組み、やり方を考えたいという話が出ていた。

2016～現在 より多くの人とともに、未来に伝える

実施内容・運営体制ともに、模索期と試行錯誤を経て、新たな展開へ

2016/4～　**つながる湾プロジェクトをなぜやるのか、どうやって続けるのか、まとまらなくなる**

2016/10　**大沼企画により「松島湾とハゼ」開始**

2017/3　K.Sと新メンバー加藤により「松島湾のハゼ図鑑」発刊

2018/6　**湾をめぐるパスポート発行**
2019/2　**「文化交流市場」開催**
（両事業が、現在のつながる湾プロジェクトの主な活動となる）

地域のことを体験する形を提案できるのがつながる湾の強みだと思ってた。個人的には、
活動を通して得られる「気づき」を共有する人を増やしたいと考えていた。

「松島湾とハゼ」は、勉強会をきっかけに生まれた。
自分で釣ったハゼが仙台雑煮のダシという食文化につながるのが面白いと思って、
やってみると、地元の漁師さんが暮らしの中で磨いてきた感覚に魅了された。
これを伝え残したい
と考えるようになった。

ASTT事業の終わりを意識するようになった。
これまでは湾内のポイントを順番に移動して活動していたけど、湾域で活動している人や団体がつながることで、
年間を通して地域を楽しむきっかけを作っておきたい。
それが結集した場として「文化交流市場」に、
この地域の豊かさが溢れたらいいな、と。

楽しくて集まっていたメンバーも少し離れ、
僕も忙しくなってプロジェクトの存続が危ぶまれた。
関わりたいという気持ちだけでは成り立たないと悶々。

最初は「綺麗な表現」としか思っていなかったけど、
アートには「掘り起こす力」があるんじゃないかと思うようになった。
凝り固まった部分をほぐしたり、視点を変える力。

松島湾とハゼ

つながる湾プロジェクトも、僕自身も、風土の流れの一部分
のような気がする。一回消えたとしても、時代を超えてまた誰かが掘り起こしてくれる。だから自分の感性を信じた表現を通せればいいのかなって。

気づけば、仕事の仕方がかわったかもしれない。
地域の文脈とエリアコミュニティを根底においた思考になったと思う。

個別のイベントに参加してはいたけれど、プロジェクト全体には深く関われていなかった。ただ、「つながる湾」で得た視点や関係性は、他の仕事やプロジェクトで活きていた。

イベントを開催しても、参加者が集まらず、仲間づくりに苦戦していた。
楽しみ（好奇心）の共有ができれば仲間が増えていくのではないか
と考えていた。

つながる湾の仲間の
強みは、それぞれが目的意識を持ってプロジェクトに参加していること。
各々様々な活動をしているから、継続的にインプット／アウトプットができる。プロジェクトを活用する姿勢でいるのがいいのだと思う。

アーティストの発想を通し、地域に多様な視点を取り入れたい。
様々なアーティストにこの地域に出会ってもらい、また地域の人にアートを通して視点が変わる体験をしてほしいなと。

「文化交流市場」の
文化軸で活動する人たちの交流に新たな可能性を感じている。

図鑑を作り始め、やりたいことができている感覚があった。学ぶ楽しさを感じた。
興味関心を一緒になって突き詰めてくれる友人と新しいものを作れることが嬉しかった。
それは「つながる湾」から生まれたこと。

自分のやりたいことは運営委員会にいなくてもできると考え始めた。運営のあり方への違和感もあり、
ここから抜けることを選んだ。

外から俯瞰してみると、
体裁だけを取り繕った企画が行われていると気づいた。
参加者も減った。協力者にも失礼だと感じた。

「文化交流市場」にテコ入れされ、動き始めたことを知る。
興味関心を追求する人たちが主体者として集まると面白い。
今後がとても楽しみだ。

誰が正しいかを決めるかのような打ち合わせの仕方に違和感を覚えた。
可能性を広げる話がしたくてアイデア発想法を提案。
でもなかなか定着できないもどかしさを感じた。

「これまでに見つけた地域の魅力を活かして活動する人のプラットフォーム」というコンセプトは共有できても、
描いたコンセプトをどうやったら継続的な状態にできるか、霧の中。
公的な資金で活動できるありがたさと、もらう以上はやらないといけないというジレンマの中にいた。

活動を担える人が足りない状態のままだったけれど、
大沼くんが始めた「松島湾とハゼ」は、
季節の恵みを体験する文化プログラムが、地元に根付いていく可能性を感じられるものだった。

アーツカウンシル東京とも協議する中で「パスポートと文化交流市場」というアイディアにたどり着き、
新しい展開が始まった。

文化交流市場

ほとんど活動に参加できなくなっていた高田さんが「文化交流市場」を積極的に動かしてくれて、松島湾で活動する人たちのプラットフォームとして機能し始めた気がする。
まだ課題はあるけれど、
掲げたコンセプトを実現する方法に近づいたと思う。

この時期は他の被災地の事業でも「そもそもなんでやってるんだっけ？」という議論をするのが増えていた。
出張するのが初年度に近いくらい多かった。

ハゼ図鑑の「あとがき」を読んで
「つながる湾がやろうとしてきたことが本当になっている！」と思った。
執筆を担当した加藤さんは2016年からの参加。地域の外に出て帰って来た人が、図鑑を作るプロセスを通してもう一度その土地と出会い直していく。そういうことが、こういった事業をやることの大きな目的だったりする。

つながる湾は表現する技術だけじゃなく、
対象への愛、個人的な動機がある
のが大きいかもしれない。

自分たちのエリアで何かをやろうとしている人たちと話す時に
「つながる湾プロジェクトで言えば」と考えることが多くなった。
事業としては、狙っていたことというか、達成すべきことを達成している事業という評価になると思う。

つながる湾プロジェクトのWEBサイトでもっと詳しくお読みいただけます。

http://tsunagaruwan.com/